

秋の蝶

焙岩の上を吹き流れゆく秋の蝶

二

蟲

遠方をよぎる灯一つ 蟲の原

同

蟲きゝに木の間に下りてゆく灯かな  
裏木戸を出て蟲きゝにゆきしまゝ

同

鱒

鱒突きの下りゆく後につゝきけり

七

鱒入れて籠を再び背負ひけり

同

鯊

油浮き芥たゝよふ鯊を釣る

九

鯊を釣る帽子の下の夕日かな  
まづ釣れてまことに小さし今年鯊

一〇

同

植  
物

木犀 木犀の大木 今も水前寺

ザボン 城門を入れば大きなザボンかな

銀杏 北空の晴れて聳ゆる銀杏かな

椎の實

椎拾ふ子供の前・に佇みぬ  
椎拾ふ子を釣り上げて片手かな

九

四

木の實

待つてゐて我にくれたる木の實かな  
つゝましくかゞみて拾ふ木の實かな  
掃きならす砂にまじれる木の實かな  
木の丸の御所の木の實や拾ひけり

七

九

同

二

菌

菌とる宿の男に近づきぬ  
くほといふ菌の汁を朝夕に  
山女釣の籠の中なる菌かな  
茸山の木の間より見え丹波路  
頬被して杖ついてなば採りに

七

同

同

二

同

曼珠沙華

清姫の墓にさゝばや曼珠沙華  
たまぐの萩の絶間は曼珠沙華  
岩の間の波にたゞよひ曼珠沙華

九

同

一〇

珠數玉

珠數玉の茂るところに舟つけし

九

こかいご

こかいごの蔓にさがりし子供かな

八

こかいごの蔓の奥なる岩屋かな

同

萩

崖萩の下に行水盥かな

同

雨風の萩の野をゆく一人かな

同

萩の中扇かざして僧來る

同

松くゞり萩くゞりゆく忌日かな

同

萩にまだ今年は早き忌日かな

九

萩淋し主人自ら挿し添へし

同

萩見舟箒を焚いてのほりけり

同

萩見舟句會用意の筆も載せ

同

遅れ來て忌日の萩を挿し添へぬ

二

二人居て靜な客や夜の萩

同

萩咲いて文之助茶屋今もあり

同

萩の野を迪れる僧と女かな

同

桔梗

噴煙のまひさがり来る桔梗かな

九

峰すつて飛ぶ白雲や桔梗折る

二

松蟲草

松蟲草鈴蟲草はありやなし

九

るりひご  
たいひご

一面のるりひごたいに日のほる

同

遠くにはるりひごたいの群落も

二

竹の春

絶壁の上に疊める竹の春

九

芋

焙岩を以て圍へる芋畑

同

無花果

無花果の大木宿の玄關に

二

烏瓜

烏瓜さがりて暗き木の間かな

八

なゝかまど

なゝかまど折り来て挿しぬ自動車に

七

稻

走り出て辭儀をする子や稻日和

七

粟

粟を干し鱒を干せる濱に出づ

九

粟籠を負うて越えゆく丘遠し

二〇

草虱

草虱大勢寄つて取りくれし

九

柿

こちら見て又柿の木を見上げをり

二

栗

打ちかこみ地圖見て居りぬ栗の下  
うつむいて栗の下ゆく馬上かな

七

一〇

桐一葉

桐一葉正倉院の門前に

同

薄

一本の薄が下の駒ヶ嶽

七

穂すゝきの中に傾く車井戸

同

だしぬけに馬が飛び出し薄かな

九

薄山のほれば更に薄山

同

薄野を行けば千里の思ひあり  
大普賢薄の上に現れし  
同

蘆  
はたきあふばかりに烈し蘆の風  
同

末枯  
紙を干す末枯の野のかなたかな  
一〇

末枯の果をバスゆき電車ゆき  
同

末枯のはてに夕日の障子かな  
同

菊  
菊の影又うすれゆく障子かな  
一〇

紅葉  
一枚の柄の紅葉の落ちてあり  
七

苔むせる枝の先なる紅葉かな  
同

街道の最中の桂紅葉せり  
同

谷かけて葡萄紅葉の大なだれ  
同

吹きさわぐ薦の紅葉の下にあり  
同

湖に突き出て濃ゆき紅葉かな  
同

絶壁の紅葉の下に舟を寄せ  
同

赤倉の雪が見えきし紅葉かな  
 七  
 碧落にかゝる葡萄の紅葉かな  
 同  
 西日して黒ずんで來し紅葉かな  
 八  
 なほ奥の紅葉につゞく寛かな  
 同  
 嶺かけて次第に濃ゆき紅葉かな  
 九  
 朝霧の晴れゆくまゝに紅葉山  
 同  
 切りくづす巖の上の紅葉かな  
 同  
 二ッ山の紅葉踏まへて雪の嶺  
 同  
 釣橋に見る天邊の紅葉かな  
 同

又空が青くなりゆく紅葉かな  
 同  
 一わたりしぐれし山の紅葉かな  
 同  
 舟に見る紅葉の上の鐘樓かな  
 同  
 吹きさわぐ紅葉の下の逆瀬川  
 同  
 廊下ゆく禰宜のかつける紅葉かな  
 同  
 堂の上の紅葉の山やしざり見る  
 同  
 祇王寺の屋根新らしき紅葉かな  
 一〇  
 折りとりて紅葉飛びちるそこらかな  
 一一



葛紅葉

正面にある庭石の葛紅葉

二

草紅葉

青竹の矢來のうち草紅葉

九

稻刈りしあとに小草の紅葉かな

一〇

砂地よりほと／＼草の紅葉かな

同

淵池の底ひの草も紅葉して

同

松原の中にひらけて草紅葉

同

龍膽

りんだうの葉は紅葉して蒼かな

九

りんだうや百貫山に日のほる

同

りんだうを折りつゝゆけば君が門

同

冬

時 候

師 走 青竹の戸樋が出来たる師走かな 七

行 年 行年の星を見に出し荒磯かな 八

行 年 行年を又旅に出る主かな 同  
行 年 の 妻 の 手 紙 や 旅 の 宿 同

行年の繩巻したる寛かな 九

祇王寺に来て行年の紅葉かな 同

祇王寺の裏へ廻りぬ年の暮 同

掃除して出てゆく尼や年の暮 同

大淀の堤をゆきて年惜む 二

祇王寺は無住のまゝに年くるゝ 同

除夜 杉風のすさぶる除夜の篝かな 一〇

冷ゆる 曉近き机に膝の冷ゆるかな 九

小春 釜を出て鯉の遊べる小春かな 同

紫陽花の實の紫や小六月 二

短日 短日や桂の大樹めぐり見る 七

冬 雑 茶屋こほつ高雄の冬に來りけり 八

しづかにも舟をやらしむ瀟の冬 九

客一人乗せて舟居り瀬の冬  
九  
プロペラの船のこだまも瀬の冬  
同

天文

冬 日 枯 蔓 の 奥 に か そ け き 冬 日 かな  
七

冬 の 日 を か く す 地 獄 の 煙 かな  
二

時 雨 朴 の 葉 の ま ば ら に な り し 時 雨 かな  
七

瀧 の 面 を 走 り つ 消 え つ 時 雨 虹  
八

鷹の巢の巖の上より初時雨  
 林泉の今の時雨は知らざりし  
 峽深く人の後追ふ時雨かな  
 山繭のさがりて青き時雨かな  
 巖かどをかすめて走る時雨雲  
 しぐるゝと舞妓は終に手をかざし  
 ストリーブの眞赤にやけし時雨かな  
 しぐれつゝ栗鼠の遊べる木の間かな  
 柴折戸をあけて手招く時雨かな  
 同 同 同 一〇 同 同 同 九 八

雪

祇王寺へ又立歸る時雨かな  
 うすれては濃くなる虹や北時雨  
 雪折のはるかな音や濤の空  
 窓下に重なる屋根や今朝の雪  
 自動車に雪深みゆく峠かな  
 杉の雪落つる清水を汲みにけり  
 今朝の雪笥の水も濁れにけり  
 雪晴の嶺に夕日のほけしさよ  
 同 同 同 同 同 九 二 同

降る雪の中の口ざしとなりけり  
 吹雪中船棧橋に著きにけり  
 雪の野の遙に起る旋風かな  
 雪の上にたゞ置いてある靴かな  
 雪の上に下りてすくめる鴉あり  
 波除の上を走れり雪けむり  
 雪晴の湖水をめぐる木立かな  
 聞いて見る雪の深さや岩見澤  
 大雪の林の中の流かな

同 同 同 同 同 同 同 同 九

雪晴れて雪まみれなる立木かな  
 何のため掘り初めたる深雪かな  
 街道の最中に築く雪の山  
 雪捨てに来て叱られてるたりけり  
 思ひきや今朝の深雪に金魚賣  
 雪簪へはひつてゆきぬアイヌの子  
 ばた／＼としづるゝ雪や熊の檻  
 雪の野に雪はだらなる枯木かな  
 銛さけて覗いて居るや雪の淵

同 同 同 同 同 同 同 同 同

飛び／＼に雪の絶間の流かな  
 雪の野の穴の流の迅きかな  
 雪の層割れ傾ける古潭かな  
 とび／＼にありてまろしや雪むぐら  
 蔓の先出てるてまろし雪むぐら  
 雪かづくむぐらの中のうつろかな  
 煙突の出てるる雪の平かな  
 雪の野の向ふの家の破風少し  
 曳いてゆく雪まみれなる丸太かな  
 同 同 同 同 同 同 同 九

日出でて日沈むばかり雪の原  
 学校のうしろにまろし雪の丘  
 傾きて雪を背負へる老木かな  
 雪の上にこぼれてるはな、かまど  
 雪けむり走つてゆきぬ雪の上  
 うつぶして雪に沈める梢かな  
 さるをがせつける枯枝も雪の上  
 倒木の雪にあらはれ川鴉  
 雪の上を走りて翔ちぬ川鴉  
 同 同 同 同 同 同 同



啄木鳥のこほす木屑や雪の上  
 大枝の折れてさがれる吹雪かな  
 雪折の枝の飛びゆく虚空かな  
 雪けむり流れそめたる梢かな  
 梢より流るゝ雪のけむりかな  
 春に咲く草何々ぞ雪の原  
 爐ほとりに舞ひ込む雪もよかりけり  
 電線のたるみて雪に沈みをり  
 雪の底涸れて水は流れをり  
 同 同 同 同 同 同 同 九

材木を積みたる上の深雪かな  
 材木を掘り出してゐる深雪かな  
 雪の坂尻を丸めて躍る馬  
 門燈の埋もれてある深雪かな  
 雪宿の廊下に暗きランプかな  
 雪窖を通る思ひの廊下かな  
 納屋までの雪のトンネルありにけり  
 灯ともして雪のトンネル通りけり  
 大雪の奈落へ落つる湯瀧かな  
 同 同 同 同 同 同 同

相つれてしづる、雪となりにけり  
 雪しづれ煙の柱あけにけり  
 日輪をかくして雪のしづれけり  
 木の間の日掻き曇らして雪しづれ  
 雪の上にくづをれてある朽木かな  
 雪晴や宗谷へ向けし遠眼鏡  
 雪晴の丘の間に日本海  
 掘り出して土がありけり雪の上  
 北十字見て佇めり雪の上  
 同 同 同 同 同 同 同 九

沈みたるまゝ馬が居り雪の原  
 幕張つて雪の公園何かある  
 雪晴の屋根の上より風  
 雪卸し犬も上つて来りけり  
 雪の上に人を落して馬佇てり  
 深雪中一水ありて芹生ふる  
 雪折の幹は聳えて鋒の如し  
 大雪のうつろにおはす佛かな  
 御佛の前にさがれる雪庇  
 同 同 同 同 同 同 同 同

水あけて銅蓮はある深雪かな  
 九頭龍の瀬に押し出でし雪崩かな  
 繩さけて上つて來り雪卸し  
 雪卸す眞上にありぬ晝の月  
 雪の上をたるみ渡りし懸巢かな  
 雪の上に並んで腰を下ろしをり  
 四五本の幹の間に雪の屋根  
 大雪の穴を覗けば戸口かな  
 卸したる雪より低き屋根なりし  
 同 同 同 同 同 同 同 九

破風口を這うて出て來ぬ雪の上  
 相迫る雪の庇の下の徑  
 枯枝の鴉もうるむ吹雪かな  
 祇王寺の木の間の屋根に今朝の雪  
 雪晴の障子の内に産湯かな  
 雪空へ飛ばん構への鴉かな  
 雪の上を飛んで水邊へ鴉かな  
 まぐれるし雪ふいと飛ぶ迅さかな  
 深雪橋わたりて叩く竹の門  
 同 同 同 一〇 一一 同 同 同

雪割つて本堂までの詣道 二

霰 萩刈つてそのまゝにある霰かな 八

みぞれつゝ、冴も啼かすなりにけり 一〇

提灯の暗くなりゆく霰かな 二

風花 風花のちらつきそめし川温泉かな 九

冬の月 庭石になほある菊や冬の月 八

釣橋にかゝればゆるゝ冬の月 九

寒月 寒月や海のやうなるキヤベツ畑 八

冬の空 鳶逐うて返す鴉や冬の空 九

地  
理

霜

霜

柱

千

本

織

つ

ゞ

き

け

り

り

二

氷

噴

水

を

め

ぐ

り

群

れ

立

つ

氷

か

な

同

氷

柱

大

垂

氷

し

て

聳

え

立

つ

タ

ン

ク

か

な

九

刈田

寛より一滴づつや冬の水

同

莫産敷いて里子遊ばす刈田かな

同

筋塀の見え来て遠き刈田かな

同

夕靄の雨となりたる刈田かな

同

冬の瀧

道の上に雪まみれなる氷柱かな  
岩壁のところゝの垂氷かな

同 九

冬の瀧落つるひゞきの音羽山

同

瀧氷る

天がかかる銀河の瀧も氷りけり  
氷りたる瀧すりさがる思ひかな

同 同

冬の水

須彌壇の脇に一壺の冬の水

同

人事

焚火 戸一枚立て、磧の焚火かな 九

絶壁をのほる焚火のけむりかな 同

楮 樺太を戀ふ女あり楮の宿 同

爐

汁鍋のいつもかゝりて爐邊の冬

七

十勝岳登りしことを爐語りに

九

犬の顔撫でつゝ爐邊閑話かな

一〇

火燧

滞行の舟の中なる火燧かな

九

火燧出て遠くも來つる枯野かな

二

汽車待ちて茶屋の火燧に居たりけり

同

泣きぬれし顔を火燧に伏せにけり

同

來る人の皆が親しき火燧かな

同

手袋

手袋のまゝにつまみし銀貨かな

一〇

頭巾

町をゆく人の頭巾も蝦夷やうや

九

スキー

室蘭を見下ろす丘のスキーかな

同

唐松の林の中のスキー道

同

倒れたるまゝしばしあるスキーかな

同

門前をついゝ通るスキーかな

同



公園のしづれがくれにスキーかな  
 滑りゆくスキーの先を飛ぶ鴉  
 門の木にカンテラ掛けてスキー宿  
 餅を焼く網がありけりスキー小屋  
 同 同 同 同 九

排雪車 札幌の大通なるラツセル車  
 同

スケート スケートに夜を遊べり驛の前  
 同

橋 二臺ある人力橋や岩見澤  
 同

箱橋に乗りあふれるる家族かな  
 よごれたる雪を積みゆく馬橋かな  
 黒マント赤ズボンなる橋の馭者  
 中天の日を仰ぎけり橋の客  
 吹きだまりありてとまりし馬橋かな  
 雪搔をさけて下りけり橋の馭者  
 蝦夷の地に橋を驅る日のつゞきけり  
 馬橋より抛り出されたる幾度ぞ  
 同 同 同 同 同 同 同 同

雪晴の楸の中ゆく馬橋かな  
 或時は谷へ傾く馬橋かな  
 水桶を積みし橋居り宿の前  
 深雪中橋裏返りたるまゝに  
 忘れめや橋で登りし十勝岳  
 曳いてゆく橋に我等の鞆かな  
 橋を曳く樺太犬は熊に似る  
 犬<sup>の</sup>橋を驅る町に一人の醫師かな  
 オホツクに沿うて橋ゆく吹雪かな

同 同 同 同 同 同 同 同 九

霧笛 燈臺と霧笛と赤し丘の上 同  
 氷切 氷切はじむる雪を搔いてをり 同  
 薄刈 薄刈る向ふの松に馬遊ぶ 二  
 蘆刈 蘆刈を見て行くほどに一口村 八  
 蘆刈りしあとの少しく焦けてあり 一〇

まばらなるそこらの蘆は刈らであり  
二〇

日向ほこ 遠くより迎の船や日向ほこ  
七

門松立 松立つる門を出てゆく主かな  
九

年用意 白紙の上の缺も年用意  
同

齒朶飾る 齒朶屑をよせてはつまむ疊かな  
同

寒造 青笹の簾の先の醜かな  
八

動物

猪

木を組んで猪つるしあり宿の前  
さし擔ふ猪のあとより獵夫かな

一〇 同

河豚

河豚の宿ひつそりとして誰もまだ  
妓まづ入りて手招く河豚の宿

同 同

鷺

巖かけの鷺を遠目や舟進む  
しづれ雪かぶりもしつゝ鷺進む  
すゝみゆく鷺のあとより雪礫  
鷺の尾の動きつゝ進むかな

九

同

同

一〇

寒鴉

前のめりしては鳴くなり寒鴉  
犬ゆきて先へ先へと寒鴉

九

二

鴨

鴨の胸並びてまろき汀かな  
飛び上り飛び上りつゝ手負鴨  
水すつて重たく鴨の飛びにけり

一〇

同

二

田鶴

田居の鶴もれなく歩きはじめけり  
田鶴を見る老に立ち添ふ童かな

一〇

同

篋鳴

篋鳴の相近づくや垣つたび

同

植 物

蜜柑 たわゝなる門の蜜柑に國旗かな 二〇

返り花 返り花手を拱いて近づきぬ 九

寒牡丹 襟巻をたれて覗けり寒牡丹 同

落葉

水の上に浮いて乾ける落葉かな  
相搏つて落ちくる朴の葉もありぬ

枯葉

鳥飛んでまばらに残る枯葉かな

冬木

並び立つ瀧の前なる冬木かな  
渡舟場の冬木に篋が釣つてあり  
蔦青く冬木の幹を包みたる

お厨子めく菓の覆や寒牡丹  
菓覆をもる日ちろゝ寒牡丹  
菓覆をゆさぶる風や寒牡丹  
菓覆に手かけし僧や寒牡丹  
兩の手にぬががす覆や寒牡丹  
覆とればまことに咲けり寒牡丹  
ぬがせたる覆をそばに寒牡丹  
かけりたる日を仰ぎけり寒牡丹  
膝ついて著せる覆や寒牡丹

ばら／＼と空に音ある落葉かな  
 大空の落葉次第にしづもりぬ  
 大空になほ遊び居る落葉かな  
 今日もまた落葉の道を行くばかり  
 落葉するどの木この木もなかりけり  
 憩ひるるあたりの落葉何々ぞ  
 しづかにも鱗横はる落葉かな  
 降りしきる落葉の下を掃いてをり  
 提灯にいよいよ／＼深き落葉かな  
 同 同 同 同 同 同 同 七

落葉踏む音の近づく障子かな  
 膝ついて何か包める落葉かな  
 かゞんほの這ひ出て歩く落葉かな  
 落葉して又無住寺となりけらし  
 駕を出て見上ぐる空の落葉かな  
 中庭の菊にも公孫樹の落葉かな  
 雪嶺の表を驅ける落葉かな  
 とりあけて拂ふ箒の落葉かな  
 書堂より下りて落葉を焚きはじむ  
 同 同 九 同 同 同 八 同



脚くゝり鶏が置きある落葉かな 九  
 青空にきら／＼するは落葉かな 同  
 青空へ錐もみ上る落葉あり 同  
 崖下の屋根へかまはず掃く落葉 同  
 峽空の落葉見上げて舟の客 同  
 帽を著て襟巻をして落葉掃く 同  
 しめりたる落葉の上の枯葉かな 同  
 林泉の落葉積み去る小舟かな 同  
 山裾の落葉の中の野菊かな 同

留守に来て誰か掃きゐる落葉かな 一〇  
 埋もれて落葉の下の小菊かな 同  
 行く人を遠めかし降る落葉かな 二

鎌倉葛原岡神社

櫻落葉 近頃に植ゑし櫻の落葉かな 七  
 水仙の前に近てたる下駄の跡 九  
 水仙に今朝の粉雪の埃かな 同

水仙を剪るや襟巻たれながら  
賣物の蟹水仙に紅唐紙

同 九

枯木

茶屋の屋根かついでゆきぬ枯木道  
枯木坂屏風かついで上り來る

同 八

寒林

寒林にすぐ散る汽車の煙かな

九

散紅葉

散りそめし紅葉の下の木賊かな

七

冬紅葉

散紅葉緋鯉は底に沈みをり  
青竹の屋根の押へや散紅葉  
連らなりて枝にさがれる散紅葉  
散り敷ける紅葉の下の草青く

同 九  
同  
二

風吹いてきらびやかなり冬紅葉  
石に落つ水のひゞきや冬紅葉  
住みなせる白き障子や冬紅葉  
茶屋こほつ谿のこだまや冬紅葉

同 八  
九  
同  
同

新  
年

元日

元日もはや夕ぐれの猿廻し

九

元日の岬の道の董かな  
元日も海苔採舟の一二艘

二

二日 修羅落し見てくるゝ二日かな

九

初日 鷗の岩を少しはなれて初日の出

同

自動車も来て居る岬の初日かな

一〇

初空 大那智の瀧の上なる初御空

九

島山の噴煙高し初御空

一〇

山の春 正面に蓬萊といふ山の春

九

初風 初風の海を左右に詣道

二

初詣 海見ゆる那智の社へ初詣

九

鹽竈の太しき注連に初詣

同

三熊野の三つの社へ初詣  
杉の上を高千穂尊ゆ初詣

同

一〇

蓬萊 蓬萊によせて打出の小槌かな

二

初荷 雪晴の佐渡へ向へる初荷船

同

飾 石段にのれる舳の飾かな

一〇

海士一人飾かけるる祠かな

同

注連繩をかけるる海士の跣足かな

高千穂に向へる門の飾かな

注連かけて蓬萊といふ離島

魼の門に飾かけゆく小舟かな

鏡餅 小舟して島の祠へ鏡餅

初湯 濱づたひ杓さけてゆく初湯かな

雑煮 高千穂の籠の宿の雑煮かな

田居の鶴見て来て祝ふ雑煮かな

弓始 打ちいだす弓矢始の太鼓かな

老松に射ぞめの弓を立てかけし

狩衣に射ぞめの弓をたばさみし

初弓をたばさみ進む神の前

初弓をたばさみ伏して祈願かな

居流れて受くる射ぞめの祓かな

初弓を取つて構へし老の威儀 二

羽子板 羽子板を籬にのせて帯直す 同

春著 引き流す春著の裾の手毬かな 同

左義長 高張を立て、守れるどんどかな 九

藪入 同舟の藪入の娘に目放さす 同

藪入の包みわけ居る舟の中 同  
藪入を下ろして舟は又廻る 同  
藪入の両手にさけし包みかな 同

萬歳 萬歳の笑顔さめゆく堤かな 二

猿廻し 新宮の磧に居たり猿廻し 九  
猿曳も獅子舞も居る磧かな 同

乗初

石狩の野を乗りぞめの馬橋かな

九

一〇

手毬

這うてゆく兒のさきにある手毬かな

九

一〇

凧

新宮の磧はひろし凧日和

九

初鴉

低く飛ぶ熊野磧の初鴉

同

なぐさ

七草のすぐ揃ひたる厨かな

九

すゝしろにまがへるものを母が捨てし

同



## 卷 末 に


この句集は「比叡」以後即ち昭和七年六月以後昭和十一年十二月迄の句を集めたものである。この間私は随分方々へ句作の旅を試みた。さうしてその時々々の俳句はホトトギス、玉藻、山茶花、桐の葉等に載せたのであるが、今その重なるものをあけると、木曾「駒ヶ嶽」と三浦平「十和田湖」東北の旅「雪の北海道」越路の雪「尾瀬沼」と白馬岳「黒部の秋」南紀めぐり「正月の高千穂」初夏の潮來「大峰山」大臺ヶ原「阿蘇」と天草「雲仙まで」等である。それに日常近畿地方で作つたところの句を加へ、千四百餘句を収めてこの集を成したのである。

比較的短い年月のうちにかくの如く長途の旅を度々試みるこ

とが出来たのは偏へに石田雨圃子、關圭草、矢野蓬矢等俳友諸君の扶  
 助誘引の賜であつて、永くその厚誼を記念したいと思ふ。  
 尙今回も虚子先生から念のこもつた序文を頂いたことは誠に光  
 榮の極みであつて、特に感謝の意を表する次第である。

昭和十二年三月九日

野村泊月

發行所  西宮市松原町六三 花鳥堂 電話西宮二四三〇番 振替大阪六三九九七九番	旅		昭和十二年三月二十日印刷 昭和十二年三月二十五日發行
	製 複 許 不  	著 者  野 村 勇	發 行 者  野 村 勇 西宮市松原町六三
	印 刷 者  内外出版印刷株式會社 代表者 須磨勳兵衛 京都市西洞院七條南		

369
467

終

